

# 『大鏡』 天皇紀の語り

—— 記憶という方法 ——

伊 神 絵 里

一 『大鏡』の天皇紀は文徳天皇から後一条天皇までを記述の対象とする。まず文徳天皇紀の冒頭部分を引用する。

01 『文徳天皇』と申しける帝は、仁明天皇御第一の皇子なり。御母、『太皇太后宮藤原順子』と申しき。

その後、左大臣贈正一位太政大臣冬嗣のおとどの御むすめなり。この帝、天長四年丁未八月にむまれたまひて、御心明らか、よく人を知らしめせり。承和九年壬戌二月二十六日に御元服、同じき八月四日、東宮に立ちたまふ。御年十六。嘉祥三年庚午三月二十一日、位に即きたまふ。御年二十四。さて世を保たせたまふ事、八年。(二二頁)

『大鏡』の各天皇紀の冒頭部分で「必ず言及するのは、帝の父、母、外祖父、誕生年月日(例外は文徳の月まで、光孝の年まで)、元服の年月日(光孝・宇多なし)、立太

子の年月日(光孝・円融なし)、踐祚の年月日、在位年数である」。これに続けて母后に関する同様の記述や、天皇自身あるいは母后の逸話がある。母后についての記述や個々の逸話はないものもあるが、この各天皇紀の冒頭部分で記述される天皇についての事項が欠けることはない。

さてその天皇についての事項であるが、冒頭部分に記述されるこれらの項目は『大鏡』独自のものではない。これらの項目は全部が必ずあるわけではないし、並べ方も一様ではないが、いわゆる「史書」の記述においても列記されるものである。一例として『文徳天皇実録』を掲げる。

02 文徳天皇。諱道康。仁明天皇長子也。母藤原氏。贈太政大臣正一位冬嗣之女也。年十六。承和九年八月乙丑。立為皇太子。嘉祥三年三月己亥。仁明皇帝崩於清涼殿。于時 皇太子下殿。御旨陽殿東庭休廬。

左右大臣率諸卿及少納言左右近衛少将等。献天子神璽宝劍符節鈴印等。須臾駕輦車。移御東宮雅院。陣列之儀。一同行幸。但無警蹕。  
(即位前紀)

『文徳実録』ではこの「即位前紀」から記述がはじまり、このあとに個々のできごとが日付に従って続けられる。その形式は『日本三代実録』でも同様である。

『大鏡』は、序に続いて天皇紀が記述される。この天皇紀から始める形式や、さらにその天皇紀に含まれる、日付とともに天皇についての「基本的な事項を列記」する形式は、六国史やほかの私撰国史などの史書の形式とも重なる。それは『大鏡』が史書的な側面を持つことにつながらう。

しかし『大鏡』と史書には大きな違いがあり、その一つに語りの仕組みがあげられる。『大鏡』の語りの仕組みは入り組んでいる。まず、語り手である世次がいる。その話を聴く立場をとる重木、侍、聴衆がいる。この聴衆の中には筆録者も含まれている。『大鏡』では、このように設定された語りの場がそのまま天皇紀から昔物語まで、段階を経て変化しながら続いていく。すなわち天皇紀も（それが十分機能しているかどうかについての評価は芳しくないが）その仕組みのもとにあるのだ。

本稿では、語り手世次の天皇紀における語り方に注目

する。それを出発点にして『大鏡』の独自性の一端を明らかにしたい。

## 二

世次が天皇紀をどのように語っているかを知る上で、序で交わされる世次と重木のやりとりが手がかりになる。03（世次・引用者注）「いで、さうさうしきに、いざ、

たまへ。昔物語して、このおはさふ人々に、『さはいにしへは、世は斯くこそ侍りけれ』と聞かせ奉らむ」と言ふれば、今ひとり「しかしか。いと興ある事なり。いで、覚えたまへ。時々、さるべき事の差しいらへ、重木もうち覚え侍らむかし」と言ひて、  
(一八頁)

04（世次・引用者注）「世はいかに興あるものぞや。さりとも、おきなこそ少々の事は覚え侍らめ。昔、さかしき帝の御政事の折は、国の内に、『年老いたるおきな・おむなやある』と召し尋ねて、いにしへの掟の有様を問はせたまひてこそ、奏する事をきこし召し合はせて、世の政事は行はせたまひけれ。されば、老いたるはいとかしこきものに侍り。若き人たち、なあなづりそ」  
(一九頁)

序では『大鏡』の語りの場が設定される。引用03は、

重木と二人で「世の中の見聞く事どもをきこえ合はせ」  
ようと云っていた世次が、雲林院の菩提講に参集した  
「道俗男女」を前にして「昔物語し」ようと宣言する。  
その世次の宣言に応えるときに、重木が「覚えたまへ」  
という語を使っている。重木は世次の宣言に対して、  
「見聞く事ども」を思い出して語りなさいというのであ  
る。世次が語るものベースには世次自身の記憶がある  
のだ。

さらに引用04では、世次は傍線部のように「少々の事  
は覚え侍らめ」と自分自身の記憶について、さらには  
「昔、さかしき帝の御政事」を引き合いに出して記憶を  
語ることに自負している。<sup>6)</sup>

次に引用するのは円融天皇紀である。

05 この帝の東宮に立たせたまふほどは、いと聞きにく  
く、いみじき事どもこそ侍れな。これは、皆人の知  
ろし召したる事なれば、ことも長し、とどめ侍りな  
む。  
(三五頁)

ここでの「皆人」は「語り手」がじかに向きあっている  
雲林院の「聴衆」に限定される<sup>7)</sup>。ここには「聞き手」  
の共感を求めて彼らを「語り手」のうちに取り込むのと  
同時に、その話題が「特別」なものである、というアク  
セ・ン・ト・づけをする作用がある(傍点原文)と稲垣智花

は指摘する<sup>8)</sup>。そのように「共感を求め」たり、「アクセ  
ントづけをする」ときに、聴衆の「知ろし召したる事」  
に訴えるかたちをとることは注目される。この「知ろし  
召したる事」は聴衆が見たり聞いたりして自らに取り込  
んだ(あるいはいつの間にか取り込まれていた)情報で  
あり、記憶されたものである。

さて次に引用するのは醍醐天皇紀である。

06 「この御時ぞかし。村上か朱雀院かのむまれおはし  
ましたる御五十日の餅、殿上に出ださせたまへるに、  
伊衡の中將の和歌仕うまつりたまへるは」とて覚ゆ  
める。

一年に今宵かぞふる今よりは百年までの月影を  
見む

と詠むぞかし。御返し、帝のしおはしましけむ忝な  
さよ。

祝ひつる言霊ならば百年の後も尽きせぬ月をこ  
そ見む

御集など見たまふるにぞ、いとなまめかしう、斯く  
やうの方さへおはしましける。  
(二二頁)

ここで世次がいう「御集」は『延喜御集』である。続け  
て引用する。

07 …後に朱雀、村上などはむまれ給へるなりけり、そ

の御もゝかのもゝを殿上人にいたさせ給へりければ、  
さけのみなとしけるに、伊衡の中將

ひととせにこよひかそふるけふよりは、もゝと  
せまての月かけとみむ

御前、御返

いはひつることたまならはもゝとせの のちも  
つきせぬ月とこそみめ

〔延喜御集〕八・九番歌<sup>⑧</sup>

06の傍線部、点線部は『延喜御集』にはなく『大鏡』の  
みに見える箇所である。傍線部は筆録者による描写であ  
り、点線部は「世継が「昔語り」の中に自分の感想・世  
評をさしはさ」んだものである。

まず点線部では「御集など見たまふるにぞ」と、世次  
は『延喜御集』を見た経験を持つことを述べる。さらに、  
傍線部で聴衆の一人である筆録者が「覚ゆめる」と世次  
の「思い出して語る様子<sup>①</sup>」を描写する。ここでは世次が  
語るこの逸話が何に拠るものなのかを聴衆に向かつて明  
らかにしており、また筆録者の描写がそれを補っている  
のだ。もちろん、世次も筆録者もあくまで『大鏡』の中  
にのみ在る人物であるから安易に実体化すべきではない。  
しかし天皇紀でそのような体裁があからさまに書かれて  
いることは注意しておきたい。

ところで、このようにその逸話の出所を明らかにする  
ものは、天皇紀の中にもほかにある。次に引用するのは  
陽成天皇紀である。

08 及ばぬ身に、かやうの事をさへ申すは、いと忝なき

事なれど、これは皆人の知ろし召したる事なれば。

いかなる人かは、このころ古今・伊勢物語など覚え

させたまはぬはあらむずる。 (二六頁)

これは陽成天皇の母后高子と在原業平との逸話を『伊勢  
物語』をもとに語る箇所である。その途中で、世次は聴  
衆に向かつて、今の時代、『古今集』や『伊勢物語』を  
覚えていない人はいないだろうという。つまり、世次は  
「古今・伊勢物語」が聴衆と共通する記憶であることを  
前提にして語っているのだ。ただし、前提にしているだ  
けであって、その前提が正しいのかどうか確かめられる  
ことはない。

もう一つ、円融天皇紀を見てみる。

09 『中后』と申す、この御事なり。女十の宮産み奉り

たまふ度、崩れさせたまへりし御嘆きこそ、いと悲

しく承けたまはりしか。村上の御日記御覧じたる人

もおはしますらむ。ほのほの伝へ承けたまはるにも

及ばぬ心にも、いとあはれに、忝なくさぶらふな。

そのとどまりおはします女宮こそは、大斎院よ

ここでは「中后」安子が女十の宮（選子内親王）を出産後亡くなり、そのときの村上天皇の「御嘆き」について伝え聞いたことを語る。世次は自分がその「御嘆き」を「悲しく」聞いたことに加え、「村上の御日記」を「ほのぼの伝へ承けたまは」ったことを語る。それは世次自身の記憶にあるものが語りのベースになっていることを明らかにする。またそれは同時に聴衆の記憶に訴えかけるものでもある。それが点線部である。

引用09では村上天皇の「御嘆き」が話題になっているにも関わらず、その「御嘆き」がどれほどのものであったのかは具体的に描写されていない。ただその「御嘆き」が深かったことだけが述べられ、それについては「村上の御日記」にあるというのみである。それを「御覧じたる人もおはしますらむ」と語り、聴衆の記憶にも訴えかける。そうすることで聴衆に村上天皇の「御嘆き」を伝え、また世次が語る「御嘆き」を具体化しているのだ。

天皇紀を語るとき、世次はただ単純に記憶していることを語るといっただけでなく、自分の記憶を語っていることを前面に出し、また聴衆の記憶をも巻き込んで語っていくのである。

## 三

世次の語る逸話は書承されたものを見て、あるいはそれを伝え聞いて語るものばかりでない。人々の間に広まっている伝承なども逸話として語られる。

10 『この御時に、藤壺の上の御局の黒戸はあきたる』と聞き待るは、まことにや（光孝紀・二八頁）

11 さて六十五年なれば、八十一にて崩れさせたまふ。

御法事の願文には、『釈迦如来の一年の兄』とは作られたるなり。智恵深く思ひ寄りけむほど、いと興あれど、『仏の御年よりは御年高しといふ心の、後世の責めとなむなれる』とこそ、人の夢に見えけれ

（陽成紀・二五頁）

12 三条院位に即かせたまふ年にて、大嘗会などの延びけるをぞ、『折節』と、世の人申しける

（冷泉紀・三四〜三五頁）

これらの用例は「人の夢」、「世の人」が言っていたことなどを世継が聞いたものである。また、その聞いたものの中でも情報の出所にそれぞれ違いがある。この内の引用12を見てもみる。

引用12は、増補本系などでは「おりあし」との校異があることからわかるように、冷泉院の崩御の時期を非

難するものである。同じできごとを『栄花物語』では次のように描く。

13 かかるほどに、十月二十四日、冷泉院うせさせたまひぬ。あはれに悲しなど聞えさするもおろかなり。内にいみじく思し嘆かせたまふ。さべき宮たちも皆うせはてさせたまひて、(…中略…) かく御位に即かせたまひて後しもかうおはしませば、御禊、大嘗会のおこたる方こそあれ、うせさせたまひぬる院の御かざりもいみじ、当代の御ためにもいとさまざまあはれに見えさせたまふ。

(卷十ひげのかづら 四九七〜八頁)<sup>(13)</sup>

『栄花物語』では同じ冷泉院崩御について、御禊や大嘗会は延期になってしまふけれど、それは「当代」つまり三条天皇のためにも仕方ないことであるというように、引用12の『大鏡』とはまったく違う評価をしている。これはどちらの評価が正しいのかというものではなく、それぞれの文脈において評価しているだけである。

ここでは、世次の語る逸話のなかには「世の人」や「人の夢」が情報源になっているものもあることを確認した。そして、それらの話の筋や話に対する評価などは確固として定まったものではなく、文脈によって容易に変容していくものであった。

さて変容していくものの中には次のようなものもある。宇多天皇紀を引用する。

14 肥前掾橘良利、殿上にさぶらひける、入道して、修行の御供にも、これのみぞ、仕うまつりける。されば、熊野にても、日根といふ所にて、『旅寝の夢に見えつるは』とも詠むぞかし。人々の涙落すもことわりに、あはれなる事よな。(二九頁)

宇多天皇が出家した後、修行に同行した橘良利が詠んだ和歌に関する逸話である。この逸話は『大和物語』『十訓抄』『新古今和歌集』にも見られる。次に引用するのは『大和物語』二段である。

15 帝(＝宇多天皇・引用者注)おりゐたまひて、またの年の秋、御ぐしおろしたまひて、ところどころ山ぶみしたまひて行ひたまひけり。備前の掾にて、橘の良利といひける人、内におはしましける時、殿上にさぶらひける、御ぐしおろしたまひければ、やがて御ともに、かしらおろしてけり。人にも知られたまはで歩きたまうける御ともに、これなむおくれたまつらでさぶらひける。「かかる御歩きしたまふ、いとあしきことなる」とて、内より、「少将、中将、これかれ、さぶらへ」とて奉れたまひけれど、たがひつつ歩きたまふ。和泉の国にいたりたまうて、日

根といふ所におはします夜あり。いと心ぼそうかすかにておはしますことを思ひつつ、いと悲しかりけり。さて、「日根といふことを歌によめ」とおほせごとありければ、この良利大徳、『ふるさとのたびねの夢に見えつるは恨みやすらむまたとはねば』とありけるに、みな人泣きて、えよまずなりにけり。

(後略)

(二五三―四頁)

この二つを比べて見ると、引用15『大和物語』の話を組み立てている最低限の要素がそのまま引用14『大鏡』の逸話を構成していることがわかる。その上で引用14『大鏡』を見ると「人々」云々のくだりが唐突である。引用14『大鏡』での主な人物は、橘良利と宇多法皇である。

そして点線部に「これのみぞ」とあることから、その二人に限定されよう。またここでは先の「古今・伊勢物語」とは違い、『大和物語』という逸話の出所は明らかにされない。一方の『大和物語』では良利大徳以外の登場人物が明らかになっているため、「たがひつつ歩きたまふ」とはあるものの、「人々」の指すものがある程度はつきりしている。つまり、『大和物語』を踏まえれば『大鏡』中の「人々」という語の指すものもはつきりするのだが、その書名は世次の語りのなかには出てこないのである。

世次の語りを受け取る聴衆の側を考えると、聴衆の中にはこの『大和物語』の逸話を知っている人も知らない人もいる。知っている側にとって「人々」は『大和物語』中の「人々」であると限定できる。しかし、知らない側にとってはその「人々」はきわめてあいまいなものになってしまふ。つまり、その逸話を受け取る側の状況に応じて、逸話の解釈が変容していくのだ。それはもちろん聴衆自体の行為として『大鏡』に記述されているわけではない。しかし、この宇多天皇紀の逸話のように語り手世次の語りの中にその可能性を見出すことができるのである。

#### 四

これまで見てきたように、天皇紀で世次はさまざまな伝達媒体にあるものを語る。それは具体的な作品に含まれて〈物語化〉されていることもあれば、「世の人」の話のように文脈や状況に応じて話の筋や評価の変わっていくものもあった。ここでいう〈物語化〉は一定の整合的なプロットを持つというほどの意味である。『大鏡』ではこれらの伝達媒体の異なるものすべてが、いったん世次の記憶として取り込まれている。そして、それらは世次の記憶としてまた語り出されているのである。そ

うすることで、それぞれ伝達媒体の違うものたちは統合され、再構成されて、世次の記憶という新たなかたちをとって提示されることになる。つまり、史書を思わせる日付を用いた記載やある具体的な作品のなかにあり「物語化」されている逸話、さらには人の夢や世の人の話のもとになっている逸話といった伝達媒体の違うものを全部、「世次の記憶」という同じ場所にある同じ次元のものとして並べることになるのだ。

さて、世次がそれらの記憶を聴衆に語ることで、その記憶は彼らと共有するものになる。語り手である世次と聞き手である聴衆の関係の一つの可能性として、聞き手は語り手の語るものを何の先入観もなく受け取るという透明な存在ではなく、聞き手一人一人がそれぞれの先入観を持って語りを受け取っていくことがある<sup>15</sup>。つまり世次が語ったものを世次が意図するままに聴衆が受け取るのではなく、聴衆一人一人がそれぞれ世次の語るものを解釈していく可能性をもつということである。

さらに、『大鏡』は、世次たちの語りを聞く聴衆の中にいた一人が聞き書いたというスタイルをとっている。聴衆が個々に世次の語るものを解釈するという前提に立てば、その聞き書きというスタイルは世次たちが語ったことはその聴衆の一人である筆録者によって変容させら

れている可能性を持つことになる。つまり『大鏡』の世次の記憶を聴衆が聞くという語りの仕組みは伝言ゲームのような不確定さを『大鏡』自身にもたらすのである。このことはすべての情報伝達で生じていることではある。しかし『大鏡』では、語りの仕組みを明らかにすることや世次や筆録者の語りそのものによって、このことを前面に出し、方法化しているのである。

さて、これまで見てきたように、世次は天皇紀を語るときに「記憶」を（で）語ってきた。自分自身の記憶をひけらかすように語ることもあれば、目の前の聴衆の記憶に訴えるかたちで語ることもあった。

では、その記憶とはどのようなものであろうか。

## 五

港千尋は、記憶について、「記憶がコード化されたイメージとしてどこかに存在しているという」「常識的な記憶の見方」を「記憶の存在論」と呼ぶ。しかし港はそうではなく、「人間の記憶は、文字や数字や信号のように書き込まれ保存されている記録ではなく、われわれが生きているすべての瞬間に、刻々と変化しながら現出するものではないか。記憶は刻印の集積ではなく、ひとつの動的なシステムではないか」と「記憶の生成論」を提



起する。そして、「生成としての記憶は、完成されたものではなく、未完成なものを通して見えてくるはずだ。記憶とは終わりなき構築<sup>16</sup>」であると位置付ける。

また次の長田弘のことばも、記憶についての示唆を与えてくれる。

記憶は、過去のものではない。それは、すでに過ぎ去ったものことでなく、むしろ過ぎ去らなかつたもののことだ。とどまるのが記憶であり、じぶんのうちに確かにとどまって、じぶんの現在の土壌となってきたものは、記憶だ。<sup>17</sup>

ここでは「記憶を、現在の前後関係や感情の動きとともに絶えず生成していくものとしてとらえ<sup>18</sup>」ている。これを手がかりに考えていくと、見たり聞いたりして取り込んだ（あるいはいつの間にか取り込まれた）情報も、その時々状況により解釈も変わり、また情報自体も変容していくことから、人の中に生成する記憶として見なすことができよう。

天皇紀では世次が自らの記憶を語ることを前面に出している。つまりそれは世次自身の現在によって構築された過去なのである。そしてその記憶は固定的なものではなく、現在の在り様によっていくらでも変容していくものなのである。

## 六

世次は自らの語りを「日本紀聞くとおぼすばかりぞかし（四九頁）」という。また『増鏡』の序においても『大鏡』を「かの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の詞をこそ、仮名の日本紀にはすめれ<sup>19</sup>」と位置付けている。

この「日本紀」をどのように解釈するか、議論の分かれるところではあるが、一つには諸注釈にあるように『日本書紀』をはじめとする「六国史」のような「史書」を考えることができるであろう。

最初にも述べたように、父や母、外祖父など天皇についての事項は六国史をはじめとする「史書」では基本的な要素であり、必ず列記されるものである。そしてこの要素は『大鏡』でも天皇紀にあり、欠けることはない。そのことは、つまり『大鏡』も一方では「史書」と同じものを目指していることを示す。それはできごとを何らかの軸で秩序づけるといふことである。ほとんどの「史書」ではできごとが時間軸によって秩序づけられる。それは六国史や私撰国史で、必ずできごとに日付をつけて並べていることからわかる。それに対して、『大鏡』は逸話を語るとき、できごとを時間軸によって秩序づけるといふ方法ではなく、できごとを世次という一人の人

物の「記憶」から語り出す方法を前面に出す。もちろん、世次は架空の人物であるから安易に実体化すべきではない。しかし『大鏡』が序で語りの枠組みを設定し、それを天皇紀から昔物語に至るまで一貫していることは重要視すべきであろう。この記憶を語る方法によって、『大鏡』はできごとを時間軸によって秩序づけるという六国史的な（あるいは「史書」的な）「歴史」の概念から抜け出そうとしたのではないか。つまり、『大鏡』はその語りを中心的に担う世次によって「日本紀」と位置付けられるが、その「日本紀」ということばが指し示すものは、もともとあった意味（たとえば「六国史」などのような意味）の枠内に収まるものではなく、そのことばを『大鏡』自身が規定するということである。

記憶は現在の在り様によっていくらでも変容するものである。また、世次によって語られた逸話も聴衆がそれぞれの解釈によって変容させることができるものである。<sup>29</sup>国家的な視野の規範の中で書かれ、時間軸によって秩序づけられた史書だけが「日本紀」ではない。現在の在り様によって、いくらでも変容の可能性をもつ「記憶」をベースとし、さらにそれを語ることによってできあがるものも「日本紀」として成立すると『大鏡』は呟き、そこに自らの独自性を見出しているのである。

(注)

- (1) 本文は、『新潮日本古典集成』（底本東松本）によった。括弧内に頁数を示す。
- (2) 加藤静子「大鏡における歴史語り」〔三〕道長伝・藤氏物語・本系帳と家伝一（相模女子大学紀要53 1990.03）。
- (3) 本文は『新訂増補 国史大系』によった。
- (4) 大隅和雄『愚管抄』における歴史と逸話（大倉山論集第四十六輯 2000.09）。
- (5) 神尾暢子「大鏡筆録の表現機構―責任免除と内容保証―」（『学大国文第43号 2000.03』）。
- (6) 傍線部にある「おきな」は『大鏡』の用例では普通名詞で使われることもあるが、「また、翁が家の女どもの許なる櫛笥鏡の（四七頁）」や「更に翁今二十年の命は今日延びぬる心地し侍り（四八頁）」などの用例もあり、一人称として使われることがわかる。そのため当該部分も世次が自身のことを自負するものとしてとらえた。
- (7) 稲垣智花「大鏡の方法―「皆人のしろしめしたること」をめぐって―」（『中古文学論攷第八号 1987.12』）。
- (8) 注7に同じ。
- (9) 本文は『私家集大成 中古I』によった。
- (10) 松本治久『大鏡』大宅世継の語り―「帝紀」について

- の検討」(武蔵野女子大学紀要二十号 1995.03)。
- (11) 新潮日本古典集成『大鏡』の注(二二頁)による。
- (12) 根本敬三編『対校 大鏡』(笠間書院 1984年)による。
- (13) 本文は『新編日本古典文学全集』(小学館)による。括弧内は巻名と頁数である。
- (14) 本文は『新編日本古典文学全集』(小学館)による。括弧内は段数と頁数である。
- (15) この考え方については、伊藤守・藤田真文編『テレビジョン・ポリフォニー 番組・視聴者分析の試み』(世界思想社 1999年)、東京大学社会情報研究所編『社会情報学Ⅱ メディア』(東京大学出版会 1999年)等に詳しい。
- (16) 港千尋『記憶「創造」と「想起」の力』(講談社 1996年)。
- (17) 長田弘『記憶のつくり方』あとがき(晶文社 1998年)。
- (18) 姜尚中『記憶』(東京大学社会情報研究所編『社会情報学Ⅱ メディア』(東京大学出版会 1999年))。
- (19) 本文は『講談社学術文庫 増鏡(上) 全訳注』による。
- (20) このことは聴衆だけでなく、実際の読者にもいえることであろう。たとえば、増補本系の存在はその一つの証拠となろう。

(名古屋大学大学院博士課程後期)